

エゾモモンガ (*Pteromys volans orii*) による巣箱利用

増田 泰

099-4113 斜里郡斜里町本町49番地, 斜里町立知床博物館

The bird nest box use of the Flying Squirrel (*Pteromys volans orii*)

MASUDA Yasushi

Shiretoko Museum, 49Honmachi, Shari, Hokkaido, 099-4113, Japan

はじめに

巣箱の設置は多くの場合、カラ類など樹洞営巣性鳥類の繁殖場所を補うことを目的として実施されている。しかし鳥類以外にも樹洞を繁殖場所、あるいはねぐらとして利用する生物は多い。特にエゾモモンガは小鳥用巣箱をよく利用することが知られている。そこで巣箱の設置が鳥類以外の動物種、特にエゾモモンガにどの程度利用されているか明らかにするために、博物館で設置した巣箱を定期的に巡回し、巣箱を利用した動物種、利用目的、季節的な利用の変化を調べた。

調査方法

巣箱は1mm厚の合板製、幅14cm、奥行き18cm、高さは手前24cm、奥28cm、出入口が4cm×4cmでカラ類の繁殖用巣箱よりも出入口がやや大きいもので(図1)、1998年5月に知床博物館周辺の海岸砂丘林内に計66箇所設置した。観察中、破損や巣箱内の清掃のため、一時的な撤去や、再設置をしたため、実際に動物が使用可能な巣箱数は57~66個の範囲で変動した。

巣箱の設置は地上から3~4mの高さに6mmのナイロンロープで樹木に固定した。設置後1998年8月から約1カ月に1回、1年間定期的に巡回し、利用状況を点検した。点検方法は巣箱上部の

点検口から内部を観察した。繁殖終了後の鳥類の巣材、利用が終わり腐敗したエゾモモンガの巣材は点検時その都度撤去した。

結果と考察

巣箱を利用した動物種は哺乳類2種(エゾモモンガ、ヒメネズミ)、鳥類4種(シジュウカラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、コムクドリ)、スズメバチの仲間(クロスズメバチ、キイロスズメ

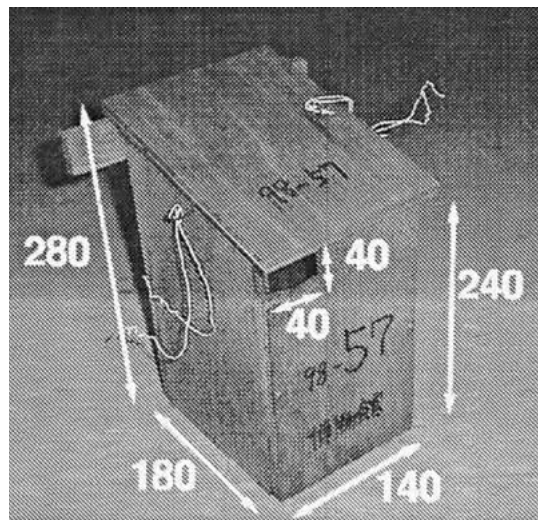


図1. 設置した巣箱。

	のべ使用巣箱数	%
エゾモモンガ	84	12.8
スズメバチ spp.	20	3.0
鳥類	20	3.0
ヒメネズミ	3	0.5
計	127	19.4

表1 巣箱の年間のべ利用数と利用率

バチ、モンスズメバチ)で、鳥類は全て繁殖、哺乳類は繁殖、ねぐら両方の利用が確認された。

総観察巣箱数あたりの利用動物毎の巣箱数の割合を利用率とした。この中で年間利用率が最も高かったのがエゾモモンガで84例(12.8%)、次いで鳥類(3.0%)、スズメバチの仲間(3.0%)、そしてヒメネズミ(0.5%)の順となった(表1)。

季節的な巣箱の利用状況の変化を図2に示した。エゾモモンガの巣箱利用は厳冬期を除いて、年間を通してあったが、他の季節に比べ高い利用率を示したのは10、11月で、特に10月はエゾモモンガによって巣箱の54.2%が利用されていた。10月をピークに利用率は次第に低下し、冬から春にかけて(1~4月)は平均2.2%と低下した。一方5月以降は再び利用率が若干上昇した。

エゾモモンガ以外の利用者では、鳥類の繁殖利用は5月が最も多く、その後減少し8月にはほぼ終了していた。ヒメネズミの利用は春から秋で、8月に無毛の子とメスが確認された。エゾモモンガとヒメネズミでは巣材の状態が異なり、エゾモモンガは藓類などの上に樹皮や広葉樹の落ち葉、ササなどを細かく裂いたものを敷き詰めていたが、ヒメネズミでは広葉樹の落ち葉が加工されずそのまま巣材となっていた。ゴジュウカラは巣箱の出入口を泥で固め好みの大きさに加工していた。

次に同じ巣箱に同居しているエゾモモンガの頭数について調べた(図3)。

その結果、巣箱における最大同居数は4頭であった。同居するエゾモモンガの数は季節によって変化し、4~8月にかけては単独、あるいは育子中のメスが多く、同居はほとんど見られなかったが、秋以降2頭同居の割合が高くなり、3頭以上の同居も見られるようになった。エゾモ

ンガの巣箱利用率が低下した1~3月は単独利用がなくなり、全て複数頭同居となった。

ここでは成獣とは大きさや、尾の形があきらかに異なり、子と判断された個体と成獣の同居の場合は育子中の母子として区別したが、観察で判断できない成長した子とメスの場合は育子中とはしていない。

育子中のメスは5~8月に確認された。出産直後と思われる体重5gの子が5月21日(産指数2)と8月6日(産子数5)に、また体毛は生えそろっているが、目はまだ開いていない体重25gの子が7月30日に確認された(産子数5)。

巣箱を利用した動物種の中でエゾモモンガの利用率が最も高く、年平均12.8%であった。使用した巣箱は、本来カラ類など鳥類用として設置されるタイプのものであるが、鳥類の利用は、春から初夏にかけての繁殖期に限られるが、エゾモモンガは厳冬期を除いて一年を通じて利用するため鳥類の4倍以上の利用率となった。今回のエゾモモンガの年間利用率は、柳川(1994)の3.47%に比べても高い。調査地の海岸砂丘林は、ミズナラ、ハリギリなどの大径木も散在するが、エゾイタヤ、ミズナラの風衝林、トドマツの密集造林地、伐採跡の広葉樹2次林の占める割合が多く、小中径木主体の構成となっている。そのため調査地ではエゾモモンガのねぐらとなる樹洞などが不足している可能性がある。今回の結果は2次林や造林地などねぐら場所が不足しがちな環境において、巣箱の設置が天然のねぐら不足を補う手段として有効であることを示している。

巣箱利用率の季節変化について柳川(1994)は、初夏(6、7月)と秋(10、11月)に利用増加が増加したと報告している。その理由を初夏については春に生まれた分散個体の利用増加、秋については夏の暑さを避け、涼しい鳥の古巣などを使用していた個体が、気温低下とともに防寒性の高い樹洞や巣箱に移ることや、夏生まれの分散個体による利用増加と説明している。今回の調査では秋の増加はみられたが、初夏の増加は認められなかった。5月、8月に出産直後の子が確認されており、斜里でもエゾモモンガが春夏2回の繁殖を行っていると考えられるので、本調査では分散個体による巣箱利用増加は認められず、秋の利用増

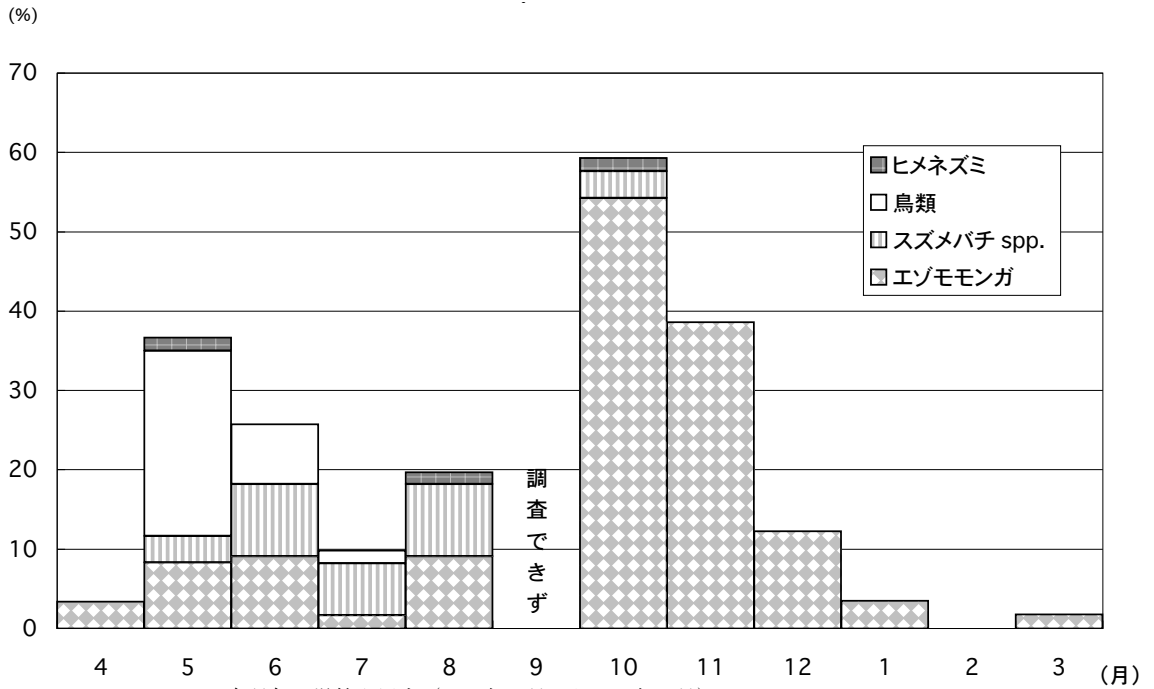


図2. エゾモモンガの各月毎の巣箱利用率 (1998年8月から1999年7月) .

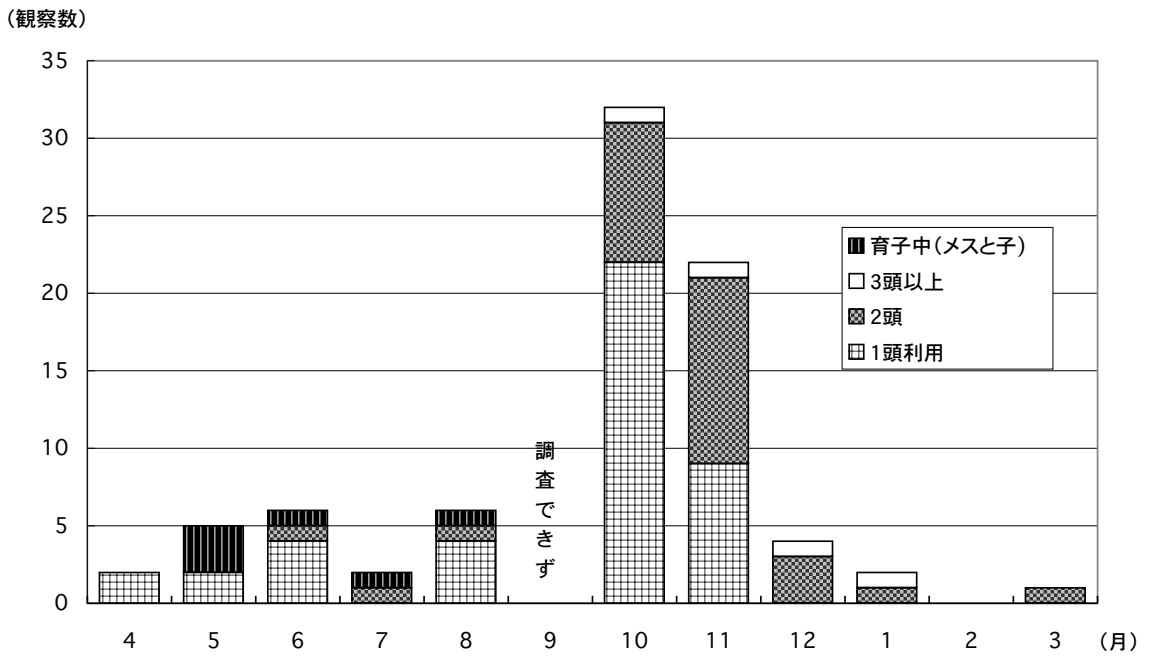


図3. エゾモモンガの巣箱での同居数の変化 (1998年8月から1999年7月) .

加についても気温低下によるものと考えられる。

冬期の利用低下と複数同居の増加については、柳川(1994)が樹洞など天然のねぐらと比較して巣箱の保温性が劣ることを指摘し、冬期複数同居が多くなることも防寒のためとしているが、2月の巣箱利用がなかったことを考えると越冬用ねぐらとしてはこの巣箱は不適であり、越冬期のねぐら場所を巣箱で補うことを考えるならば、巣箱の保温性を高め、より多数同居が可能な大型の巣箱を設置することが必要であろう。

結論

- ・巣箱を利用した動物種の中でエゾモモンガの利用率が最も高く、年平均12.8%であった。
- ・エゾモモンガの巣箱利用は10月にもっとも高く、その後徐々に減少し、厳冬期にはほとんど利用がなかった。4月以降、再び利用されるようになった。
- ・春から夏は単独での巣箱利用が多かったが、秋以降複数の同居が多くなり、冬季(12～3月)には単独利用は見られなかった。

引用文献

柳川 久.1994.小鳥用巣箱を用いたエゾモモンガの野外研究. 森林保護241:20-22.